

森の上には三年

兵庫県立大学 理学部 物質科学科 浅利響

大学での数年間を振り返ると、私が最も力を注いだのは勉強だったように思います。しかし、勉強会などで集まって何かをした、という経験はほとんどありません。自分一人で、興味のある分野についての参考書を読むなどといった勉強が主でした。大学に入ってまわりを見渡してみると、そういったある種の熱意のようなものを持った人は稀であるように感じました(お前にはあるのか、とか言われると、私もそんな大層なものを持ってませんが)。私がそれを続けられたのは、入学前からある程度やりたいことが決まっていたから、というだけだったように思います。私は大学に入って、大学の物理をしたいという思いがあり、実際に、大学生活の三割弱程度、物理を勉強していたように思います。

勉強は一人でしていたといっても、その他の方面で、たくさんの友人に助けられました。おそらく多くの他の学生と同じように、僕も大学卒業までの目標しかもっていませんでした。その先の進路が決定的に分かれたのは、大学二年の春休みに、友人が大学院の研究室見学に行こうと言い出した地点だったように思います。今考えるとそれは時期が早すぎましたが、しかしその時期だったからこそ、そこで見学した研究室で得た情報から、私はその年の夏に10日ほど筑波で外部の組織主催の学生実験をする機会を得ました。さらにその学生実験の行事の中で、いくつか講義を受ける機会がありましたが、そのうちの一つの講義がとても印象的で、結局その講義をしていた教授の研究室を志望し、来年度はそこに行くことになっています。

つまり、外部の院の試験を受けたのですが、院試に限らず私の主な勉強方法は、参考書をとにかく写す、いわゆる写経という方法でした。これは前述のような揶揄をされがちなのですが、飽き性の私にはよく合った方法でした。指先と頭の両方が常に動いているため、飽きても指が動き、指が疲れても頭が働くのです。私は難しいことが書かれた本を読んでいるとすぐに眠くなるので、上記方法を使って、なるべく集中が続くようにしていました。ただ、この方法を取っていた理由はもう一つあります。私が勉強していた物理や数学という分野では、参考書を読む際には、その本における論理の流れを読み取り、必要に応じて文章や数式の論理の穴を埋めなければ理解しにくい箇所が出てきます。そこでは、実際に紙に書くなどして、それらを整理していくとやりやすくなります。結局、参考書のほとんどの部分を初めから理解することはできなかったのも、ほとんどすべての箇所に対して写経をするという形に落ち着きました。

物理をやっている以外の時間では(そちらの方が圧倒的に多いですが)、大学の数年間でいろんな趣味を獲得しました。読書の習慣はもともとありましたが、それに加えて、映画鑑賞やカラオケ、ボルダリングなど様々なことに挑戦しました。とにかく新しく何かを始めるのはとても難しいことだと個人的には思いますが、新たに何か発見することも多いと感じます。何かやってやろうと思うことがあれば、体なり頭なりを動かせるだけ動かして、できるだけ挑戦してみるのがいんじゃないかなと私は思います。

最後に、優秀学生としてこうした機会を与えてくださった皆様、お世話になった教員の方々やたくさんの友人に感謝を申し上げます。ありがとうございました。